
居酒屋にて

kamome303

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居酒屋にて

【Nコード】

N7969P

【作者名】

kamome303

【あらすじ】

居酒屋での酔っ払い達のひとコマ

とある居酒屋のカウンターで、二人の男が酒を飲んでいた。二人とも40歳代のサラリーマンのようだ。

時間は夜の10時。店内は一番盛況な時間帯で混み合っている。

カウンターは20席、テーブル席が10机位の普通の居酒屋であるが、料理の味の良さが評判で連日満員の繁盛振りであった。

一人の男がジョッキを口から離してテーブルに置いた。ジョッキの中にはまだ半分くらいの黄色い液体が入っている。テーブルの上にはホッピの空瓶が5本くらい立っていた。

「おまえさあ、しかしあれだな。どう思うよ。あの総理大臣はよお」
かなりろれつが回らなくなっているその男は、ペイズリー柄ネクタイの結び目もすつかり緩んで、ワイシャツの襟元がだらしなく半開きになっている。

男は、机に置いたジョッキの取っ手から手を離さず、焦点が合わなくなった目つきで、隣に座ったもう一人の男のほうを見た。

「にやにおう、総理大臣？おう、アーム ソウリーだなあ？」

こちらの男も、負けず劣らず典型的な酔っ払いオヤジのスタイルになっている。

どちらかと言えば、アルコールに対しての耐性が低いのか、男の顔は髪が生え際まで真っ赤に染まっている。10度ほど右に傾いて鼻に引つかかっている黒ぶちのメガネからはずれた半開きの眼は、白目の部分が少し黄みがかっていた。

「おう、あいつの屁はくさいなあ、えへへ、へーい」

総理大臣の屁を嗅いだことがあるはずもない男は、への字に曲げた口の端にヤキトリの串を咥え、プラプラ動かしながら言った。

「へえ？屁はくさいんだ！臭くなければ屁じゃない！臭いから屁と
いうのだ。臭くない屁は屁じゃない。それは・うん、香水だあ、
うん、そうだ。香水はいいにおいだからケツからでも屁じゃない

ぞ。ケツから香水、ケツから香水つくらあ」

ペイズリーネクタイ男は、そういうとジョッキを口元に持って行き、グビリと一口飲み込んだ。

メガネ男は、相変わらず串をプラ付かせながら、見下したような目つきでペイズリーネクタイ男を見ると、「けっ」と舌打ちして言った。

「香水がケツから出るわきゃねーだろ。香水は・首から出るんだっ、ばかたれっ」

その時、カウンター越しに二人の会話を聞いたのだろうか、若い定員が少しニヤニヤしながら「へい、お待ち」と焼き鳥が2本乗った皿を二人の前においた。

メガネ男は、口から串を引き抜くと、ペイズリーネクタイ男のジョッキにポイと放り込み、新しい焼き鳥を口に運んだ。

ペイズリーネクタイ男は、アルコールがかなり脳に回っているようで、自分のジョッキに串が入っているのを発見すると妙な声を出した。

「ありやゝりやゝ、ホッピーから串が生えてきたあ」

どうやら、だれかが串を入れたとは思いつかないらしい。突然ジョッキに串が生えてきたように見えたようだ。

するとメガネ男は益々小馬鹿にしたような目つきになり、指摘した。

「あほか、ホッピーから串が生えるわけねーだろ。それは、、神様が入れたんだあ」

「おお、か・神様かあ。。。」

ペイズリーネクタイ男は、そう言うときヨロキヨロ周りを見渡しはじめた。

「神様は、どこにいるのかなあ。どんな顔をしているのかなあ」

いつの間にか焼き鳥を食いつくし、また串をくわえているメガネ男も、一緒になって辺りを見回している。

「やっぱし、神様というくらいだから、こつ、面長で、無精ひげな

んかが生えていてさ、オーマイガツてな感じやる」

その表現が気に入らなかったのか、ペイズリー男はゆるんでいたネクタイの首元に指を突っ込んで、ぐいぐいとさらに緩めながらメガネ男の鼻面に顔を向けた。

「いんや、ちゃうどー。日本の神様だから、そんなガリガリなビンボ臭いはずはない。もっとこう、ぷくつと福福しい姿をしててだなあ。でかい鯛なんか持ってたりのするのだ」

と言いながら、席から腰を浮かせ、両手で空中に大きな魚の形を描いてみせた。

メガネの奥の濁った目で、その動作を見ていたメガネ男も、くわえた串をぶらんぶらん振るわせながら中腰になりゼスチャーを交えた意見を言い始めた。

「日本の神様と言えば、なんつといっても、ベンテン様じゃろおお。こおおんな髪型に、こうギュツとくびれた腰にだなあ、すんげえ色っぽい目つきで福を呼んでくれるのじゃあ」

メガネ男は、もう席からすっかり立ち上がり、腰をくねくね、あやしい目つきで気色悪い表情を作りペイズリー男を斜視している。色っぽいつもりなのかアルコールのせいで眼球のコントロールが効かなくなってきたのか定かではないが、その目つきがまたペイズリー男の気に障ったようだ。

「ベンテン様は、そんなおかしげなツラはしとらんぜよ。もっとこう、こうウルウルした目でだなあ、わしらを見てくれるんじやいい」ペイズリー男も席を立ち上がり、カウンターテーブルに手をつきながら、なぜかエセ坂本竜馬風の思い込み土佐弁で、メガネ男に向かって目に力を入れて顔を突き出した。

それを見たメガネ男は、怪しげな目つきで口をへの字に曲げたまま、啜っていた串をプツと噴出した。噴出された串は、うまい具合に前に飛び、カウンターテーブルに置いたペイズリー男の手の甲にペタツと張り付いた。

まだ手の感覚はあるらしい。ペイズリー男は手についた串をつか

むと、それをメガネ男の目の前に立てて叫んだ。

「おんどりやーあー！、て、手に串がささったじゃないかあー！
！」

突然のあまりに大きい声だったために、カウンター越しの店員もビクツと皿洗いの手を止めて二人の方を見た。

串を目の前に突き出されたメガネ男は、酔っ払って赤くなった顔をさらにどす黒くして負けじと反論した。

「ば、ばかやろー！。そ、それは神様がやったんだろうがぁ。
天誅である！」

「てんちゅううーう？て、てめえ！ふざけるなあー！」

ペイズリー男はメガネ男の胸倉をつかみ上げ、血走った目でメガネ男をにらみつけた。

メガネ男も負けてはいない。ペイズリー男のゆるみきったネクタイとワイシャツをまとめてつかみ、怒鳴り返した。

「なにおう！こんにやるー！やるのか！やるってえのかあ！」

店員は、目の前で始まった酔っ払い同士のケンカに、口を「あゝあ」という形に曲げてしばし傍観している。

ペイズリー男は、どうやらケンカは売ったものの、買ってくれるとは思っていなかったらしい。がっぷり四つに組んだ形のままちよつとの間固まってしまった。

すると、メガネ男は、首を締め上げる手に力を込めたようで、ペイズリー男の血走った目がますます赤くなってきた。

苦しくなったペイズリー男も手に力を込める。すると力の均衡が微妙にずれてきて、二人の体が数センチ傾いた。

メガネ男のカウンターテーブルには、ホッピーの空瓶が数本立っている。その一本にバランスを崩したメガネ男のひじが軽く当たり、カウンターの上でカチャンと倒れた。

それを見た店員は思わず「あっ」と叫ぶ。

その音と声にギョツとした二人は互いに胸元から手を離れたため、テーブル上ではそれ以上の被害は出なかったものの、腹の虫は収ま

らないらしい。

「てめえのせいだぞ、このやろっう。けりいつけてやる。表へ出る！」

「おおっう！いいだろう！やったるうじゃねえの！」

そう怒鳴り合うと、にらみ合ったままカウンターを離れ出口に向かい、縄のれんをくぐって外に出ると、扉を勢いよく閉めた。

その直後、酔っ払い二人の叫び声が店内にも聞こえてきた。

「うおりゃー、てめえ、前から気に食わなかったのじゃあー」

「うるせえ！おめえこそなんじゃそりゃー」

（がちゃん、ぼこん）

なにかぶつかるような音も聞こえてくる。

今や、店内ではあつけにとられて眉までへの字に曲げた店員だけでなく、大半の客が聞き耳を立てて騒動の成り行きを聞いていた。

しばらくすると、声も物音も聞こえなくなった。

はっと我に帰った店員は、やっとけりがついたのかと思いつつも、怪我をされていても困ると思い、店の扉を開けて恐る恐る外に首を出してみた。

いつもどおりの路地がある。店の看板もいつものままだ。二人の姿はどこにもない。人通りも数人だが、何事もなかったように通り過ぎていく。

外気が顔に心地よい。

店員の口がへの字から、アルファベットのオーの字に変わった。

店員はひたいに手をやって叫んだ。

「あちゃー、やられたあー、食い逃げだ〜」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7969p/>

居酒屋にて

2010年12月29日17時25分発行